

## (1998年秋号)日本の公園 第1号

ガーデニングが大流行との事である。TVの番組も登場し、雑誌も発行されている。我が家の近くでも、それらしい庭作りや、玄関前の花の配置など、可愛らしいものも見受けられるようになった。これから降雪期までの短い期間、制作した庭ばかりでなく、通りがかりの人の眼を、けっこう楽しませてくれるに違いない。

花や緑を賞で、庭の山水を楽しむ習わしは日本に限ったことではない。古来から洋の東西を問わずにある心象だ。しかし、庭を解放して、皆でそれに親しむという習慣はかつての日本には無かった。庭とは貴族や大名や僧侶や大金持が私的に楽しむものであって、一般に解放されてはいなかったのだ。つまり、“私園”はあっても“公園”は存在していなかった。

もっとも日本人は昔からあくせく働くばかりで、暮しのゆとりなど無かったから、“散歩”というのを初めて知ったのも明治以降。ぶらぶら歩きなんて、なまけ者の証拠か泥棒くらしいにうさん臭いと思われていたのだから、たとえ公園があってもそこを散策するなどは考えもしなかったかもしれない。

庭園を貴人のものから大衆のものへ、という思想が西欧から伝えられたのは、明治維新以降だ。

本州各地の公園は大家の没落などで止むを得ず家屋敷を手離すことで公園化して行ったのだが、札幌ではもちろん明治以前からの名園など存在していない。すべてが新しく造成される。というわけで、札幌は日本で最初の公園を作った。札幌に開拓使が置かれた明治二年。その二年後の明治四年に早くも岩村通俊判官によって「遊観ノ所」が整備された。

東京の上野公園などが、明治六年の太政官布達によって「公園」となり、これが日本の公園の始まりと云われているが、正式名称の「公園」の名を付けられたかどうかは別として、その二年前に実際に札幌で公園は誕生している。その遊観ノ所の名を「借楽園」という。今も文化財として保存されている建物「清華亭」を中心に、北大クラーク会館から南は伊藤邸あたりを含むかなり広大な一帯だったという。開拓使はここに農業試験場や水産試験場などを作り一帯を公園的に整備し、また農産品等の展示も行なった。清華亭は迎賓館だった。

当時の札幌は、小さな水流が気ままに枝分かれして流れていたらしい。元々豊平川の扇状地だから地下水は豊富、方々からこんこんと泉(メム)が湧き出し小川となっていた。

中でも有名なのが植物園の温室前から湧き出ているメムである。実は私自身、かなり長いこと植物園をのぞいていないので、現況がどうなっているのか、ちょっと心配なのだが、かつては、街なかで地下水がこんなに湧き出るものかと感心するほどの量であり、おいしい水だった。この水が、植物園の池に入り、北側で北五条通りの地中を抜けて、伊藤邸へ行き、さらに鉄道線の地下をくぐって、立並ぶ民家の裏手を蛇行していた。

この流れはいったん竜神池に止まり、さらに北大の中央ローンに入り北へ進んでいく。

日本の公園第一号は、この流れに副って造成されたものだった。流れの名は確かシヤクシト二川ではなかったか。

戦後しばらく、この流れは、道路や線路の下をかいぐりながらも、その姿を見せていた。

明治の頃の古い写真に、池を前面にしてガラス戸が縁側のように連なっている木造の建物を写したのがある。これが水産試験場のように使われた建物らしく、前述の池は竜神池と思われる。といっても今はもうこの池はない。北七条西七丁目、民家の並ぶ裏手、すっかり干上ってしまって“北七条かいらくえん公園”という児童公園になっている。かつてはこの池の南の端に、竜神様をまつる小さなほこらもあったのだが。

この川の先はどこにつながっていたのだろうか。明治の頃にはサケがこゝを遡上してきていたらしい。試験場もだからこゝここに出来たのだろうか。

水は池から北大構内に入り中央ローンで学生たちがのんびりと寝そべったりしてるが、戦後しばらくは、清流がながれ、浅いが大きな池になっていた。サケの産卵には絶好の場所だったのかもしれない。

昭和三十年代に入ると、水はほとんど涸れたのだろう。清華亭南側の民家の裏手を蛇行していた流れにはコンクリートのふたがかぶせられ、下水道となった。よそのお宅の裏手を勝手にのぞくわけにはいかないので、勿論遠慮しているが、今でも、ほかの下水路と違い、古い河川の流れなりに、くねくねと曲った下水路が残っているに違いない。

北大ローンが今でも池の底の名残らしく、周囲より一段低くなっているように、清華亭近辺を歩いてみると、小さな坂がいくつもあつたりして、札幌の街には珍らしく、土地に高低差があるのに気付くはずだ。

明治のはじめ、開拓使が札幌の地にやってきて、街づくりを始めた頃あくまでも平坦なこの扇状地の中で小さいながらも起伏を持ち、しかも清流が右に左にと曲折し、時折り池を作ったり瀬を作ったりし、しかも野花が咲きサケがのぼるのを眺めてこゝこそ札幌の庭園を作るにふさわしい場所だと考えたのだろう。

それにしても、こゝを私園にせず公園にと考えたのは、先見の明というべきか。

しかし日本の公園第一号はそう長くは続かなかった。その理由の一つは、さらに眺望の良い中島公園の造成に開拓使の眼が移ったからであり、一方で経済的理由もあった。どうやら開拓使がこゝを完全に公園化するには予算が不足していたらしい。勝手に推測するのだけれど、明治六年太政官布達で上野公園などがいわば正規の公園として認知されたのだがこれらは、すでに完成していた庭園を一般に解放したもので、いわば維持管理だけが必要だった。しかし札幌の場合は、まず造成をしなければならぬ。当時の国の思想としては多額の造成費を出してまで、民に公園を与える必要があると考えたかどうか。借楽園は民間の費用で造られることになり、結局は土地の切り売りや、民間払下げという形にならざるを得なかった。清華亭は一時料亭となつたりして、結局は公園の機能を失ってしまった。それにしても、日本の公園発祥の地くらしいの碑が残っていても、と思うのだが――。